

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成 16 年
- 月号

毎月23日発行
通巻 412 号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年12月23日
★発行所 大倭出版局
奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



鶴岡八幡宮



目蓮上人説法の跡



源頼朝公の墓

11月1日、鎌倉にて 齋藤正宏さん撮影 (一泊文化行事報告・4頁)

平成6 (1994)年11月23日月次祭法話より 宗教は社会福祉の心(下)

法主 矢追日聖

光明皇后の罪を反省する心

福祉の施設も、光明皇后さんに作って欲しいと言われたんです。この人も生きてる時には、ライ病患者の世話をしたり、いろんな事しはった偉い人らしいけれども、また反面一つの罪を作ってる。それは、藤原一門から皇后さんになつてるのやから、あの時代としたりえらい権力者ですわ。だから国分尼寺を造れと言え、全国に一齐に造るんやもん。そのために、どれだけの材料と、どれだけのお金と、今みたいに機械で簡単に出来へん時代に、どれだけの労力と、犠牲をはらうたか考えてみい。

しかし結論は、お寺を建てたから言うて、何にもならんとおっしゃるんです。社会福祉になつてないわけなんです。そらまあ坊さんが今日まで守りして文化財になつて結構やけれども、ただ文化財としての効果だけじゃ、お寺自身が何にも人間を幸せにしてないわけやわね。

光明皇后さんは、自分は罪を犯している、恥ずかしいとおっしゃる。だからもう一度、千二百年後の今の世で、自分のほんとの心、つまり現在の言葉で言えば社会福祉の心で仕事をしてほしいと。それが光明皇后さんの心なんです。

まあ、そういうようなことを言葉とか話としてだけやなしに、心で受けとめる皆さん方になってほしいなと私は思う。

今月号の『おおやまと』はまた自分で読んで下さい(法主様、孫 曾孫

世代に語る「子供時代 おおやまと」そしてこれから。ここで生まれて大きくなってる子供達が、大倭のことを知らないで、法主さんから昔の話やとか、色んなことを聞かしたってほしいと言われてね、これは子供との話し合いですね。だから今日は年いってる人ばかりやから（笑）、ここに書いてる程度のこととは必要ないと思うし、その代わりに、安宿苑の文化祭やから、こういう話をしております。

お互いに幸せに暮らしていく心

皆さん方には特に、神さん祀って拜んでそして御利益ごりやくがあるのが宗教だというようなことはね、忘れてほしいと思う。病気になった時にはお医者さんに掛かってもらったら結構なんです。

そしてまた幸せになりたかったら、人間と人間がお互いに親しく愛し合う、そういうような心を皆持つてほしいと思う。あの人嫌いや、この人好きや、そういうような心をなくしてほしい。

人間と人間は、みんな神さんの力で生かされているということ、生きてるんじゃないんです、それをもっと自覚してほしい。世の中は、一人で孤立しては生活できないんです。みんなの力。私の着ているこれ一つでも私が作ったのと違うんですよ。材料作つてもろて、織つてもろて、また縫うてもろて、幾多の人の手によって出来上がつていく。社会では、自分だけ孤立しては絶対生活できない。自分達がこうやってお互いに結構に生きていけるということは、社会みんなのお陰なんです。だから生かされておるんや。

心臓を動かすのかで自分ではできへん。心臓を動かしてくれるのは、神さんの力です。自然の力と言うても同じや。神さんという言葉を使つて

だけで。みんなが平等に空気吸わしてもらて、平等に天地自然の力によって生かされている、その力が神さん。そうである以上は、みんな神さんの子供なんや。

その時に神さんは人間一人一人みんなに、何かの能力を持つて生まれさせておるんやから、自分の持つてゐる能力を發揮して、そしてお互いに助け合つて——これが相互扶助です——みんなが幸せに暮らしていくというような心になる、これが宗教心なんです。宗教の心というのは神さんの心、自然の心ということになるんです。

皆さん方も大倭へお出でになつたら、そういうような心になつてほしいと思います。

光明皇后さんやとか聖徳太子さんが、宗教で行けと言われたんで、私も大倭教というような宗教団体の名前を使つてますけれども、何度も言いますが、御利益主義的な宗教ではないということは、皆さん方もよく自分の肚はらに入れてほしい。

その上で大倭に来られる皆さんは、共に育つてきた兄弟 家族というぐらいの気持ちで、お互いに無いところは助け合つて、みんなが幸せにいくようにお付き合いをしてほしいと思う。

幸せということはね、言葉で言うたら、これは何にでも喜びを持つということなんです。たとえば、うちの施設の中には、身体障害者もおれば心身障害者もおる、あるいは痴呆症の老人も入つてます、色んな人がおります。その人達の場合でも、自分で喜びを持つ、その時間、これが幸せやと思う。

幸せというものには永続性がないんです。全部瞬間的なものなんです。けれどもその瞬間を何遍でも繰り返して持つてゐるような人が幸せなの。若い人なんか、恋愛時代は天に昇るほど幸せやと思つてる。ところが結婚してしまつてみい、だんだん

ん熱が冷めてくるわ（笑）。今度子供が出来たら、うるさくなつてくるわな。そうなつたらボンと離婚するというのがこの頃流行つとる。だから、この人と結婚できたら幸せやなと思つてる、その心には滅多に永続性がない、瞬間的なものやねん。だから本当の幸せとは何ぞやということになるんやけれどもね。今が幸せやと思つたかて、そんな心はずぐ変化する。

ベ縄なというのは、二本の縄で縛うと、表と裏の目が出るわな。そのように人生には、善と悪とか、幸と不幸とかいうものが、裏表にへばりついているということなんです、これ。

結局、幸福というのは喜びの時間をできるだけこしらえるということなんです。永続性がないねんから、その日その日の自分として、日々何か喜びを持つてゐるような心になることが幸せの連続なんです。

だから私はね、朝、目を開いたらね、あんたら笑うか知らんけどね、一番先に小便しに行くねん。ああ今日も小便出してくれる。ほんでまたすぐには大便出えへんけど、今日かて十一時頃、ちゃんと按配出て来てん。ああ大便も出してもろた、ああ身体の中のパイプは健全や、ああ嬉しいな。それから幸せですわ、その瞬間は、ものすごく嬉しい（笑）。

そして、今日は文化祭や。ああ今日も嬉しいな。みんなの顔見たら、私が施設長として現役でおつた時分の住苑者が、喜んで話を聞いてくれる。ものも全然言えないようなややこしい、その子のお母ちゃんも一緒に来ておつて、私の挨拶を聞いて「この子涙こぼしてますねん」と言うんや。まあ至福の喜びと言うんかね。そういう喜びの連続が幸せになつてくるねん。

だから皆さん方も、一日の中で必ず、今日は嬉

しいなと喜びを持つような時間を作ってください。朝目を開いた時に、ああ生かされてるな、ありがたいなと思う、それでもいいんです。それでまたお日さんとか神さんに向かって手を合わせて、朝の礼拝する。それがもう喜びの第一歩やわね。そういうようなものが連続していつてくれた時に、お互いに幸せな人生がおくれると思う。

それで最期のお迎えの時に喜んで逝けるようにということやけど、何かこの頃、臨死体験とかテレビでようやくとるなあ。けど、あれは殆ど嘘やで。ほんまの臨死体験、ほんまに死んでしまっている霊の世界というのは、肉体とはつきり切れてしまわなくては分からへんよ。また戻って来て、もの言えるように記憶しているんやもの、あれはちよつと変わった夢の一部分なんです。だからまあ、あの人はそういう経験してはるんやなど、その程度で聞いといてほしい。本人は何も嘘言っていない、本当のこと言うてるんやから。夢の物語やけどね。

とにかくね、どうか皆さんもお互い仲良うしてほしい。それで、それぞれ喜びの時間をようけい持つてほしい。一日一日を、何でも悪く解釈せんと、善意に善意に解釈して喜んで暮らしてもらったら、人生は幸せに続いていくと思います。そういうふうなつもりで皆さんと長くお付き合いしていきたいと思つてます。

私もね、今年の二十三日で満八十三歳になります。(鈴月母さんの声、「今月とちがうよ」)

来月、来月、十二月の二十三日、これはもう痴呆やな(笑)。生きてることには大分もう堪能してるけど、生かされてるから、すかたんも言えるわけや。死んでたら言われへんわなあ(笑)。

(鈴月母さんの声、「幸せ!」)
そやそや幸せや。生きてるから言える。これも

また喜びと考えると一番ええわな。私もお陰さんで、来月二十三日までは健康にいけるやろと思えます。皆さんもお暇があつたら、遊びに来て下さい。何も降誕祭やからお祝いに来ようとか、神さんに参ろうとかやなしに、まあ私の顔でも見に行こうやないかという親しい気持ちで遊びに来てほしい。これは遊びですからね。

私の父親が八十歳で死んでますねん。そやからもう私、父親よりも三年長生きさしてもろてるねん。母親は、八十五か六まで生きとつたかな。私もまあ何とかそこまでぐらいは生きてるやろかなあと思つてます。

縁のある者同士

生きてる間は皆さんの顔を見られますしね。ということ縁のある方ばかりなんです。これはもう古い縁。たとえば、ここにお供えしてある大根一本見たかて、始め黒い小さな種を土の中に埋めて、芽が出て目に見えてきて、形ができて大根になつてるんや。今こうして皆さん方と私が親しく会えるその前には、土の中みたいなもので霊界があんねん。だから今世だけというような、そんな縁が浅いものと違うねん。

誰とでもですよ。夫婦になるのもそうやで。みんな前の世からの宿縁というものがあつてね、今こうして出てくるんや。だから昔から蒔かぬ種は生えぬと言ふねん。結婚するにしたかて、前の世からの何かの繋がりがなかつたらできへん。それを縁と言ふねん。だから皆さん方とこうして一堂に座つて話ができるということも、またこれ前の世からの何かの縁があると私は思います。

だから私の生きてる間は変わりなく、肉親の親戚とか家族以上に親しい気持ちにおいて皆さんと

お付き合いしていきたい。もう先が短いだけにね、よけい皆さんと親しく遊びたいと思つておりますのでね、今後もよろしくお願いします。

時の波蕩(その十一)

流れの淵について

林 修 三

それは夢のようでもあつた。澄み切つた青空の下の白色に輝く力強い岩、古代の人々は踊り、そして唄つていた。まさにこの世の平和境。しかし、そこに一人ウツウツとし、心染しまない私が出た。私は私に問う、「戦い、煩う心は、この私自身が望んでいるのか?」。そこにはハッキリと見たのだ。この世の平和を心からは望んでいない正に私自身を。

「私」とは何なのか? 移ろい、止む事のない大きな時の流れの淵において、「私」が、「私」がと叫び、凡てを自分自身のものにし、名誉に、財産に、地位に、家族にしがみつこうとしている、底しれない強い欲求の根元であるこの「私」とは。

それは決してその川の如き「かんながら」の流れの内には入ろうとせず、その側にいて、苦しめ、嘆き、力み切つていく。

気がつけば、幾多の同胞も又、その岸に立ち続けている。その岸には此岸も彼岸もなく、今この世を生きるヒトも、過去に生きたヒトも共に立ちつくしている。数多くの恐怖を胸に、なす術もなく……。

「まつろえぬ者達よ。恐れから逃げてはいけません。ただ、それを見つめよ」

我等をばげます声がある。
それは夢……のようでもあつた。

第281回 大倭会文化行事報告

秋の一泊旅行

平成16年10月31日～11月1日



龍口寺 (10/31) 石田昌男さん写



鎌倉宮の護良親王が
幽閉されたという土牢 (11/1)



宴会風景 (10/31) 下2枚は野保夫さん写

今に残る武人、日蓮の影

あじさい邑 杉本 順一

今回の文化行事で鎌倉方面へ行くことは、昨年平成15年10月に平家滅亡の地 壇ノ浦に行った時から、みんなの声があがっていた。

壇ノ浦に行く前の9月25日、「ヒトニイキ ヒトニシナント ウマレシニ マコトノミチニ ワレワイタラズ」と懺悔の心を私に伝えてきたのは源頼朝公であった。

あれから1年、湯浅芳郎氏のお陰で大倭会文化行事で鎌倉行きが決まったのである。

今年の10月19日のこと、「ミナモトト ナノルモノミナ コゾツテオマチモウス ヨリトモ」

「ニチレン カマクラニテマツ」

「ニチロウ(日朗) ヒサシクオマチモウシマス」

と次々に出てこられた。

10月23日の月次祭の時には、「キヨメテクダサ

レ」と北条政子から言われる。

私には鎌倉は初めて訪ねる場所である。

今回の文化行事をどう考えればいいのかと思っ

ていると、「和の光の意味、大きさを皆に伝えよ、鎌倉に立つことが、法主の心、和の光を屈けることになる」と法主さんは言われる。

10月31日の当日になった。天気予報では今日、明日共に傘を離せないとのことである。

出発前の挨拶に行くと、奇稲田姫さん、法主さんはじめ次々とご霊人達が「共に行く」と、にぎやかであった。

そんななか、「ワレラノサトニモ ドウカハヤク(我等の里にも、どうか早く)」とアテルイさんからの挨拶もあった。(私、忘れてはいません)

10時10分、京都駅に集合、新幹線のホームへ。

10時40分発車。車中での昼食となった。小田原に着いたのは14時46分。JR在来線で藤沢駅に。

タクシーに分乗して龍口寺へ。この寺は、法主さんと縁の深い日蓮上人が斬首の刑を受けんとし

た所である。『やわらぎの黙示』114頁で「一大事の因縁——日蓮をめぐって」に、

文応元年(一一六〇)三十九歳のとき「立正安国論」を最明寺入道(北条時頼)に献じた

ことにはじまり、文永八年(一一七一)

平左衛門尉頼綱に文書を送り再び「立正安国論」の大義を高調されたことで龍ノ口での死罪となり、神秘出現によって執行不能となつたため、佐渡の流罪となつたのである。

と、法主さんは記されている。

私達がこの土地をお訪ねしたことを、「ウレシクオモウ」と言われる日蓮上人の心につれて、私はホツとした。

あとは早めに江ノ島岩本楼に着いた。宴会の始まる前に、龍界と現界について、私の感じたことを少し話した。

宴会で笑い疲れて部屋にもどつた。風呂に行つた人も多かつたが、私は中村昇次さんとテレビを見ていた。いつの間にか4人部屋の私達の所にバラバラとお人が集まりはじめ14、15人になつた。皆、思もおもしろい話をして、11時30分頃各部屋にもどつて行かれた。

5時頃、雷の音で目が覚める。台風かと思うほどの大雨と大風である。こりや鎌倉入りは大変なことになるかもと、思いはめぐる。そんな時、「リュウカイヨ シンジヨ」と感じるものがあった。どうなるか分からないが、考えるのをやめた。

朝8時30分、岩本楼を出て、ジャンボタクシー5台とマイカー参加の3台で、鎌倉に出発する。大雨、大風はうその様におさまっていた。

鶴丘八幡宮に参拝。すぐ大銀杏が目がいった。「イチョウノキニテ オマチモウス」(サネットモ)と、前もって言われていたからだろう。実朝公の名ばかりが我々の口の上つていたせいかな、「クギ

ヨウモ ココニオリマス」と一言苦情(苦)もあつた。そうだ、私達がここに集まつて来たのは、「和の光」をどけるためだから、実朝さんと公暁さん両方を会わせる必要があつたわけだ。

次いで源頼朝公の墓に参る。小高い所にあるが階段は幅も狭く、タクシーも待ち時間15分などと言われたので、随分と気ぜわしいものだった。墓の前でゆっくり心を通わす間もない。手を合わせて去るだけかと思っていると、「ドウゾ サワツテクダサレ」と頼朝公の思いが伝わってくる。とにかく、皆さんに少しでも墓石に手をあててやって下さいと話して、順次下りていくこととなる。(鎌倉宮のことは、字数の関係でまたの機会に)日蓮上人辻説法の地に参る。この地の日蓮上人の心境は、どんなものかとお尋ねする。

「ワガ ミチユクコト イクヒサシ」「ワガジンセイノ タイハンハ ココニアルトオモウベシ」と言われた。次いで「二チロウ マイル」と日蓮上人の声もあつた。

感謝と慰霊の旅を得て

奈良市 川端 一弘

文化行事一泊旅行は満十年目の参加であつた。個人的なさまざまな経緯があり、参加できなかつたと表現するのがあつた。文化行事は法主さんが常々語っておられたように単なる観光や学習の行事でなく、過去の人たちとの現地で交流の行事でもある。交流する機縁を持てなかつたことは、私自身に精神的な余裕がなかつたためであろうし、また天の計らいでもあつたのだろう。その意味において今回の参加は、転機を経た自身にとつてうれしかった。

さて当日は未明に目が覚め、子供のようにソワ

ソワしている自分がおかしかった。関東地方の天気予報は雨模様を伝えていたが、参加できることのみで満足し、雨は全く気にならなかつた。

定刻に小田原駅に到着し、東海道線を経て藤沢駅に出る。藤沢駅からは宿泊地の江ノ島へ向かう途上の龍口寺に寄る。龍口寺は日蓮が佐渡配流(実質は鎌倉を出た地にて斬首というものだったらしい)に際して斬首の法難の地とされる場所である。境内には土牢跡が残り、その前には「文永八年未辛(一二七一)九月十二日」の日時を刻んだ石柱があり、「身軽法重、死身弘法」の文字が刻まれている。「死身弘法」とは身を捨てて法を広めることだそうである。佐渡配流という日蓮の人生の転機を語る句として相応しい。

旧暦の九月は新暦では十月にあたる。私たちが訪れた十月三十一日、この日江ノ島ではイソギクやヨメナ(カントウヨメナ?)がさわやかに開花していた。七百三十余年前これらの花は日蓮の配流途上を見送つたのであろうか。

翌日は雷鳴で目が覚めた。時計を見ると五時五分前であつた。風雨は次第に強くなり五時十五分ごろには激しいものとなつた。寝床で昨夜の中西会長、杉本順一氏の挨拶での自然災害や龍神顕現の話の思い出した。その後まどろんだのか気づけば時計は六時半を指していた。雨は止んでいた。七里ガ浜沿いに鎌倉市へ向かい稲村ガ崎を越え由比ガ浜に入ったところには雲は薄くなつていた。海岸より鶴岡八幡宮の参道に入り参拝した。参道は松や桜の並木が美しい道である。春の陽気には花が美しい装いを加えてくれるだろう。

鶴岡八幡宮といえば大イチョウである。実朝が暗殺された舞台として著名なイチョウだ。樹齢は優に千年を越えるものだそうだ。梢の葉が少なく太い枝が伐採されている姿が気になり通りがかつ

た巫女さんに尋ねた。先月の台風で大枝が折れ潮を含んだ強風で梢の葉が痛んだそう今年はいよいよ黄葉は見られないようだ。銀杏は実らないというから大イチョウは雄木である。大イチョウを楽しむとともに実朝を偲び慰霊した。

宝物館の説明によると鶴岡八幡宮は前九年の役の後、源頼義が康平六年(一〇六三)に石清水八幡宮を勧請した八幡宮(元八幡宮)が前身で、頼朝が治承四年(一一八〇)鎌倉入りした後に再度遷宮したのが現宮の基とある。治承四年は頼朝が平家打倒を開始した年でもある。

境内には大イチョウの他にビャクシン(イブキ)とイヌマキの大木が生育している。ビャクシンは鎌倉市の天然記念物に指定されていた。

頼朝の墓、大塔宮(護良親王)へ参拝した。両地は八幡宮より東へ僅かの地にあつた。鎌倉幕府創始と滅亡の時と時代を隔てるが兩人を偲んだ。親王の悲劇は義経の悲劇に通じるものがある。両雄は新しい時代の創設者に貢献したにも拘わらず創設者により死に追いつめられた英雄である。新時代創設時における歴史の冷酷な非情さである。頼朝の墓へは皆手ぶらで石段を登つたため供物がなく、昨日新幹線車内でいただいた飴玉一つをお供えし、中西会長夫妻ともども参拝した。

日蓮辻説法の跡地を訪れた。勿論鎌倉へ上京した日蓮が日々この場所のみで説法を行ったわけでもなく、その主要な場所というものであろう。案内していただいたジャンボタクシーの運転手さんの説明によるとこの附近は材木座があつた当時のメインストリートにあたるという。鎌倉の名越(下層民の住居する地域だった)に草庵を結んだ日蓮が当時の繁華街であるこの附近に出て辻説法を行ったのである。日蓮三十五歳の頃という。

終戦の年より大阪に出て、新しい日本の宗教の

夜明けを街頭で呼びかけられた法主さんはこの地を訪問され感慨深いものがありになったことと思う。私が今回の旅行で一番楽しみにしていた場所であった。その後、昼食し鎌倉大仏を各自散策しそれぞれの帰途に就いた。

小田原へ向かう車中まどろみ目覚めると、雲の切れ目より秋の日差しが帯をなし相模の海を白く輝かせていた。心中黙して天に充実した旅を終えられたことを感謝した。

自然現象に感じる警鐘

群馬県安中市 桜井 誓子

木々は実を結び、鮮やかに彩られた葉の落葉は深まる秋の鼓動を、再び人の耳に届けている。季節は巡り、旅はまた新たな場所を迎えた。東の古都鎌倉がその地である。関東人の私でさえも、近いようで遠い場所になっており、特に江ノ島での宿泊は、小学生の修学旅行以来でもあって、懐かしさを覚えた。今回、関東圏の参加者も多かったそう、その夜の無礼講も、多才な賑わいであった。昇ちゃんの上機嫌そうな笑顔が、私達の顔を一層綻ばせた。

翌、十一月一日の明け方、外は既に雷雨であった。大倭会の旅行に龍神さんは付きものだと聞いていたが、約束事のように出発時には雨は上がっていた。やはり、龍神からの挨拶は何か嬉しく感じる。車は相模湾岸から、若宮大路を真直ぐに鶴丘八幡宮へと向かった。まさに鎌倉の顔といった八幡宮は、往時、武士の都を鎮守する神社として鎌倉武士の心に拠り所となっていたことだろう。

五年にも及ぶ源平の争乱は、一一八五(文治元年、壇ノ浦での平氏滅亡をもって終息した。平治の乱で伊豆へ流されていた源頼朝だが、長い雌伏

を破り、平氏に替わり源氏中心の武家政権の樹立を果たす。そして一一九二(建久三年、鎌倉に都が開かれた。京都 奈良を模した都市計画や幕府の支配機構の周到さは、東国を中心とした新政府への気概を感じる。八幡宮では、そうした鎌倉の永統を祈願した頼朝や武士達の当時の思いを間近に覚えるようだった。

東国の独立心の強い武士団を束ねて政権の頂をなした陰に、一族をも追い込む事態をとった頼朝公は、どのような心境にあるのだろうかと思いがながら、八幡宮に程近いその墓前に立つ。訪れる人が多い中で、「墓石に触れて欲しい」というのが霊人の思いだったことを聞き、人間味を感じながらどこか安堵した穏やかな気持ちで墓石に触れた。

頼朝公の鎌倉は移ろいを見せる。二代將軍頼家は謀殺され、その弟で三代將軍実朝も公暁(頼家の遺児)により横死する。こうして首座の源氏は、政権をめぐる陰謀術策により滅びた。近親者による功利争奪の状態は、源平の争乱以来、鎌倉の都にも根底に横たわっていた。

政権は北条氏の手に移った。一方、後鳥羽上皇による朝廷勢力挽回を謀った承久の乱も起こり、幕府内外で事件が勃発する。参道であるはずの若宮大路も戦場と化した。現在、人の往来で賑やかな通りに、歴史となつていった古人の魂魄が偲ばれる。同時に、平和で賑やかな光景が貴く思われる。実は、鎌倉行きの前に気になることがあった。

各地の水害に加え、十月二十三日に起きた新潟の地震だった。新潟は地震地帯と言われているが、これは何かあると感じていた。果たして、杉本さんによると、「霊界を忘れ、人間中心の人の心に對する龍神からの警鐘が現象となつている」という。今回の水害や地震のことは、あの時代、鎌倉に起こった洪水や地震を想起させた。さらにまた

元寇のあることを予知、指摘して、立ち上がった日蓮上人のことを思わずにはいられなかった。

幕政を独占して北条時頼の頃、鎌倉は最高期にあったが、同時に蒙古の威力を新たな外圧として感じていた。社会不安が増大した鎌倉の路の辻に、正法を説く日蓮の声があった。住宅の家並の中に今も残る辻説法跡は、地上の仏国土を目指し獅子吼する日蓮の在りし日の姿が感じられるようだった。次々と起こる災難について、「法を見失った世と人心の腐敗 墮落、現実逃避へと導く指導者の誤った考えが、災難へ繋がる。この苦しみを克服して、仏法の教え(法華経)を拠り所として、平安な国土の実現に努めることが、人の進むべき方向である」と日蓮は進言するが、当時の為政者や大方の人の心には届くことがないままに、文永 弘安の蒙古襲来を受けることとなった。

しかし元寇は、奇しくも大風が吹いたことよって、回避され事なきを得た。法主様は「元寇の場合は蒙古が侵略であり日本は自衛上の防戦であった」からと言われている(『やわらぎの黙示』34頁の「神慮に国境なし」より)。

人への軌道修正の警告が、自然現象を通して示されることを、鎌倉時代から改めて確認する。

北条氏の鎌倉幕府も、足利尊氏、新田義貞等、別系統の源氏の手によって、百四十一年間で幕を閉じた。倒幕の功労者であった後醍醐天皇の皇子、護良親王も一転して抹殺されるのだが、その幽閉の場所が鎌倉宮としてお祀りされている。

古人が体験し、示してくれた栄枯盛衰の悲しさ厳しさを心に刻むことも、現界からの鎮魂とした針盤として生きた日蓮上人を近く感じられたこと、今、法主様を通して示されていることを深く感じた鎌倉であった。

「だまことだま

「チッソ水俣病関西訴訟」と共に

奈良市 庄野久子

2004年10月15日、澄みわたった秋晴れの午後、最高裁判所の南門では、「チッソ水俣病関西訴訟」の最高裁判決を勝ち取った、川上敏行原告団長と永嶋里枝弁護士が満面の笑顔で、『熊本県の責任を認める』のたれ幕を仲良く持つて記者たちに応えていた。

とうとう、最高裁が原告らはメチル水銀中毒症（すなわち水俣病）であり、また、水俣病が発生し被害が拡大していたのに国と熊本県が何もしなかったのは違法であると、はっきりと行政の責任を認めたのだ。

川上さんはこれまで応援してくれた方々、署名をしてくださった全国の皆さん、やっと、これで国に一矢報いることができました。責任を果たすことができました。有難うございました」と万感の思いで報告した。

ここまで来るのに22年かかった。たった58人の患者が1982年に大阪で始めた裁判。原告もすでに22人が亡くなっている。

チッソ水俣工場の排水中のメチル水銀が不知火海を汚染したために起こった水俣病事件の被害者で、生活の糧を求めて関西に移り住んだ人々が、毎月1回集って水俣病のこと裁判のこと等を話し合ってきた。今も続いている。が、高齢化と体調悪化のため、参加出来る患者が少なくなってきた。今後は、環境省や熊本県などの行政交渉が続く。どこまで続くのだろうか。患者は疲れきっている。「私らは最高裁で国に勝つたのに、どうして環境省の役人は何も変えないって言うの？ 言えるの？」「あなたたちは私らが死ぬんを待つて

るとね？」と田端さん（原告）は迫る。

公式な水俣病患者発生は1956年。48年もたっているのに、この判決がどうして画期的なの？ 1996年の政府解決策で水俣病は終わったんじゃないかったの？と思う人も多いだろう。

しかし、いまだに被害実態の解明の取り組みはなされていない。特に、メチル水銀による健康被害の解明は急がれる。いまや、この微量汚染被害対策において、日本は遅れた国になっている。

皆、ご縁なのだろう。つれあいの明博と一緒に患者や仲間らとお付き合ひしてもう30年になる。

先のとれ幕は勝訴した時に何も無いのはダメと言われて、急遽、私がパソコンで字を作り、マジックと墨で塗りつぶし作成したものだった。ナイス写り！と、つい岸野さんに電話して原稿依頼されてしまったが、この裁判を支えてきた多くの人々の思いと力に心から感謝してこれを書いている。

HP <http://www1.odn.ne.jp/aah07310/>

鎮魂につはじまる

熊本県水俣市 高倉敦子

水俣病発生から50年という節目にあたるこの夏8月28日、大いなる加護をいただいて、石牟礼道子による新作能「不知火」は無事に奉納された。いつかこんな日が来てほしかった、海に向かつて捧げたかった、何を？と自分に問うならそれは、たつたひとこと「互いを思いやる心」だった。

縁あって水俣に流れ着いた25年前、悲しみがあまりにも渦巻いて、時々とてつもなく苦しかった。もがけば闇に閉ざされ、見えないものにつき動かされて狂いたくなる。何度か脱出を試みたが連れ戻される。そんな荒ぶる心につししか生まれたのが「この場所で、魂の底から踊れるようなまつりをしたい」という思いだった。口にしてはいけな

い気がして、願いを足下に封じ込めた。

「能を奉納したい、それも水銀ヘドロの埋め立て地で」と漁師の緒方正人さんに呼びかけられた昨年のこと、予期せぬできごとが胸が高鳴った。これだったか！「能」の力をお借りしてみようと同じ場所に立つこと、一瞬の光を信じてみようと同じき始めた途端に思わぬ加勢がやって来た。まさしくこれは龍神さんとの共同作業？「魂を鎮めるために魂を振るい起こす」。水俣にそんな流れがやって来た。驚いたのはみんなで台本の朗読をはじめたことである。声がほとばしりはじめた。

——主人公の不知火は生類の輪廻を司る龍神の娘の常若とともに人間の垂れ流す毒を自らの身体をもって浄化せんとし、死んでいく。その姿を哀れむ菩薩がふたりの婚礼を許し、その再生を祝して音曲の楽祖を呼び寄せ、犠牲になった猫や魚の霊とともに舞をまう。——息も絶え絶えなその声と本気でひとつになろうとするその瞬間にこそ不知火も菩薩も会いに来れる、そしていつしよに涙も流せるんだと、石牟礼道子さんに寄りついた言葉たちが教えていた。

「能が水俣病の幕引きになるのでは……」と心配する声にはこう答えたい。「鎮まつてこそ動き出せるはず、呪縛から放たれてこそ生き活きと躍動ははじまるのではないかと」。

その日、何があるうと水俣の上だけに太陽が現れると確信した。あとはみんなの心だけ。台風のご真ん中にて自然と祈る。奇跡は起こり海は風ぎ、赤い雲、光る水、波の音。待つて待つて待ち続け、「夢ならぬつつの渚に海底より参り候」。

とうとう不知火は会いに来た。嬉しくて懐かしくて、沢山の魂が風になって舞い手の衣を揺らしている。願っていたのはこんな賑わいだった。昇る月が明るく照らしてくれたこの夜、最後まで見守つて下さった全ての存在にありがとう！

A W T C 日誌

11月15日 大倭神宮月次祭。七五三で坂田洋美さんが孫のすずちゃんとお参りされました。

奈良市千代ヶ丘の川端ハギノさんが85歳で帰幽されました。

紫陽花邑の草創の頃を知っておられる方でした。長男の一弘さんは最近、教務本庁によく顔を出して大倭の新聞類のバックナンバーを整理してくれています。

11月16、18日 大倭印刷(株)で富雄南中学2年の男子2名が職場体験としてコンピュータの勉強をしました。朝9時から午後3時まで、挨拶もハニカミながらでしたが、覚えるのは早く

「若いうちはいいなあ」と社員の方が若返った様子。昇ちゃんには子供には優しく高校生には負け、中学生に一番對抗意識を燃やすので、真先に友好の握手をしてもらいました。

11月20日 夜、交流の家でF I W Cの定例委員会。台風23号で被害を受けた兵庫県のキャンパーの実家やその他、また新潟中越地震地でのボランティア活動について報告がありました。

命日の近い元管理人の飯河梨貴さんを偲んで夕食会。

11月23日 大倭大本宮月次祭。有志の皆さんのお世話で、馬場田の神饌田で今年収穫された新米の赤飯がふるまわれました。

午後4時から大倭会役員会。

11月26日 屋久島の手塚賢至さんと4人の方が、奈良で開催された森と鹿害をテーマにするシンポジウムのパネラーとして来られ、この機会に来邑、交流の家泊。大倭会館で本紙編集部や有志と夕食会をして、井手泉

川端一弘さんとは真剣な議論になっていました。手塚さんだけまた大倭に戻って29日にもう一泊されました。

11月27日 夜、大本宮拝殿において今年も賑やかに「備中神楽」が催されました。下段の写真は、

「松ノ一尾さん」が話し掛け、子供達が答えているところ。

11月30日 午後2時から大倭病院の中間決算報告役員会。

12月1日 杉本順一さんは、大倭印刷(株)を退職、今後は教務本庁に居ることが多くなりま

す。杉本さんの話「教務本庁とは?」タホウトウとの答えを頂きました。

平成の多宝塔を作っていきたいと思います。

12月4日 大倭神宮において金鶏祭。

12月6日 大倭神宮月次祭。夜、邑倭の会。

新年のご挨拶を申し上げます

「戦争反対、平和建設」の声、現社会にあつて耳にする言葉の中でこれほど嬉しく響くものはないのである。もし社会の人達が、真にこれを望むならば、現在人の多くの人々が心の中にもっている「人を呪つて、怒る心、人に頼る心、人と争つて」などを神ながらの法に基づいて錬磨修養し、各自が放つ霊波長をまず第一に浄化することが基礎的条件であると思つて。

大倭六十一年 元旦

おおやまと あいさいむら

大倭紫陽花邑 代表 矢追 家麻呂

邑人一同



大倭安宿苑では(菅原園)

11月15、16日 今年最後の宿泊旅行に最重度の14名とご家族が参加、ホテルを近場にして宴会に趣向をこらしました。

(須加宮寮)

11月30日 青垣園と施設交流会。ホテルアジュール奈良でカラオケやゲームを楽しみました。

(長曾根寮)

11月19日 伏見保育園から可愛い訪問があり、涙される方もおられました。

11月25日 イトーヨーカドー奈良店のご協力により4階フロアで出張スパーを開店、大好評を頂きました。

(八重垣園)

12月1日 開設9周年記念日の行事が行われました。

12月8日 俳句クラブ。「神事アハライトに映ゆる紅葉かな」

A T M i C

*年始祭(大倭神宮)

1月1日(祝) 午後0時半から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶して午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)

1月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第四三四回禊会

1月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*大とんど

1月10日(成人の日) 午前10時より大本宮西の齋庭にて。

*月次祭(大倭神宮)

1月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)

1月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

お願いとよびかけ

法主様ご帰幽満10年を記念して大倭大本宮で計画しておられる法主様興津城の整備造成に、何卒各人の分に応じご協力をお願いします。

大倭会会長 中西 正和

1. 奈良信用金庫 学園前支店 普通++ 1.4
口座名 大本宮特別整備基金
中西正和
2. 郵便振替口座 ++4++ \$1\$- / 3.7
口座名 大倭奉賛会